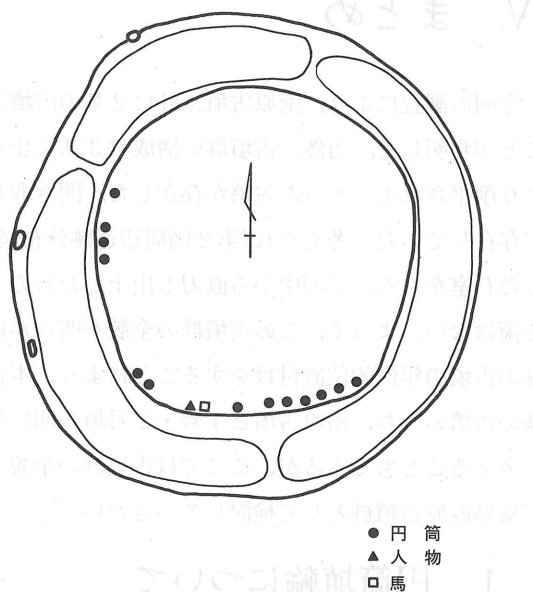


ている例（出土状態が近接しているとは限定せず）は、摩利支天塚古墳、上原3号墳、稲荷2号墳、狼塚古墳、明神山5号墳が挙げられる。この中で、現時点では、摩利支天塚古墳が一番古く、西暦500年を前後する時期に位置付けられている。^{註③}この中で上原3号墳と明神山5号墳は、人物と馬が近接した位置から出土しており、人物のポーズも左手を挙げ右手を下げているなど、本古墳出土の形象埴輪と同様の状況を示す。大沢氏は、明神山5号墳出土人物埴輪の腰部背面にカマ痕があることに注目し、このような形態の人物埴輪を「馬飼い」と位置付けている。^{註④}本墳出土の人物埴輪についても、先に述べたような共通点があるものの、



第31図 埴輪配列復元図

多少違った点が見られる。腰部が欠落しているため、カマの有無は確認できない。この人物埴輪は、乳房がある。^{註⑤}頭には突帯を廻らしていることから、鉢巻を頭に巻いている状態を示していると考えられる。また、その突帯から何かを垂れ下げていたかのような貼りつけの痕が、耳穴前に残る。手も左手を挙げ右手を下げているが、真横ではなく、やや前後させている。以上の点から想像を逞しくすれば、垂れ飾りを付けた鉢巻をした女性が踊っている状態を表現しているともとれ、「踊る埴輪」とも考えられる。製作技法において、顔面の粘土板成形、腕の作りが中実式であること、耳朶の省略などから、6世紀中葉以降の人物埴輪と考えられる。^{註⑥}

3 2条突帯埴輪について

もう少し時期を絞り込むために、本墳出土の埴輪が2条突帯であることに着目し、県内における2条突帯埴輪と比較検討してみる。

まず始めに2条突帯埴輪の分布範囲を押さえてみたい。

第32図は突帯数別にみた埴輪を持つ古墳の分布図である。この分布図から次のような傾向が窺える。但し、埴輪を持つことはわかっているにもかかわらず突帯数が不明な場合が多く、あくまでも大雑把な傾向であるが、調査例が増えればその傾向はより鮮明になると思われる。

①鬼怒川以東において、突帯数のわかるものはすべて3条突帯であり、不明なものも透孔などの位置からみて、3条以上の可能性は考えられるが、2条突帯は今のところ確認されていない。

②田川、思川（姿川・黒川）流域に2条突帯の分布がみられる。但し、この地域は図からもわかるように3条も多条もあり、また1つの古墳においても2通りの円筒埴輪を持つ例（亀の子塚

古墳等)がある。この点に関しては、時期及び古墳の規模などを限定して考えれば、もう少し整理されると思われる。因みに、渡良瀬川流域の円筒埴輪については、全体像が不明であるが、今後2条突帯の資料が増えてくるとと思われる。

③低位置突帯埴輪の分布域と4条以上の突帯の分布域とはほぼ重なり、鬼怒川以東では、現時点において確認されていない。両者とも大型の古墳に採用される場合が多いが、中規模の古墳でも採用されている(米山古墳、水道山山頂古墳等)。

以上、大まかにみると、鬼怒川を挟んで様相が違っていることがわかる。鬼怒川以東においては常に下総・常陸との関連が考えられる地域であり、これに対し鬼怒川以西においては上野・武蔵との関連が考えられる地域である。円筒埴輪において、6世紀代になると非常に地域性を強くみせる段階となり、3条突帯は下総・常陸に一般的に見られる形態となり、2条突帯は上野・武蔵に一般的に見られる形態となるという。この指摘に従えば、本県においては、鬼怒川を挟んだ西と東で、それぞれの近接した地域との交流(埴輪工人間の技術交流、移動等)が行なわれていたとも考えられる。

次に②で指摘した2条突帯分布域(田川・思川流域)における2条突帯埴輪の変遷についてみる。現在までのところ、本県における埴輪の変遷を扱ったものとしては、岩崎・森田両氏における小山市域の埴輪を扱っての検討、小森氏^{註⑧}や石川氏^{註⑨}の宇都宮南部地域の埴輪を扱っての検討、小森氏の本県中、南部における円筒埴輪の編年試表^{註⑩}などがあり、これらを集大成するような形で『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷』の「栃木県」の中で石川・森田・小森3氏が円筒埴輪の諸要素の変遷試表及び今後の課題をまとめられている。その後においては、秋元氏^{註⑪}や水沼^{註⑫}氏が銀杏葉刻線に着目しての検討などがある。

本稿では、特に円筒埴輪の器形の変遷に着目し検討を進めていきたい。

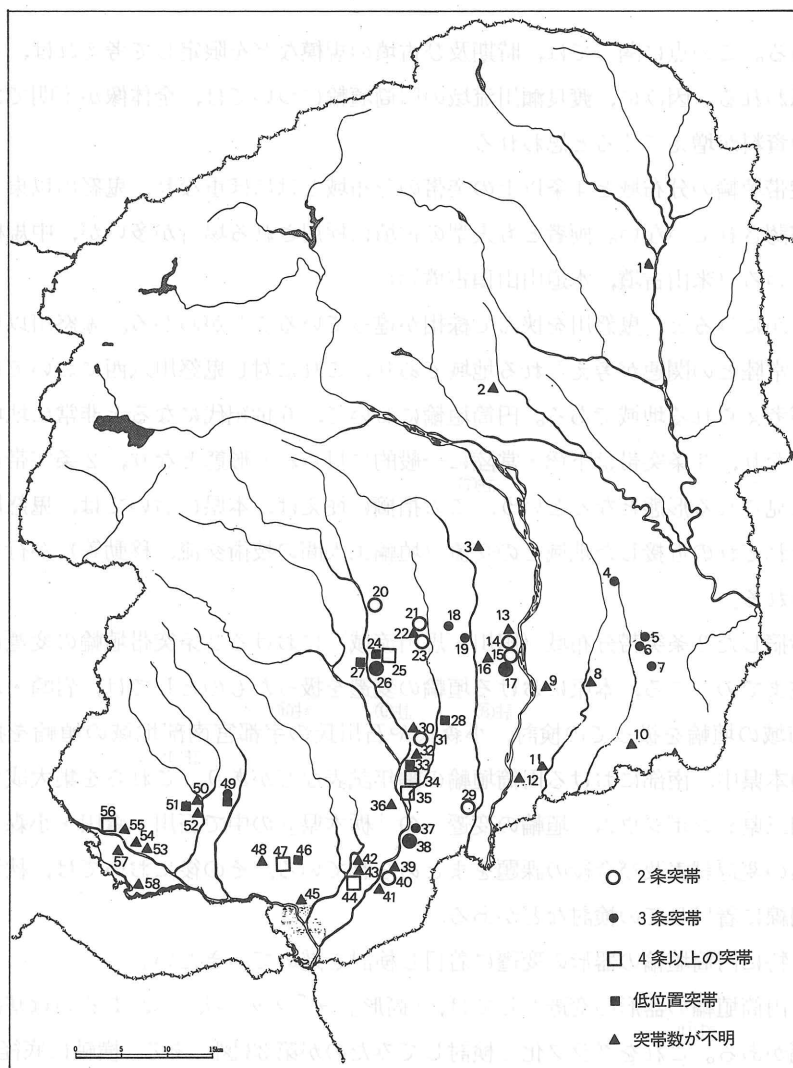
従来から、円筒埴輪の器形の変遷としては、「筒形」→「ラッパ状」へ、あるいは基部が長くなるなどの指摘がある。これをグラフ化し検討してみたのが第33図である。横軸に底径/口径^{註⑬}、縦軸に基部の高さ/器高をとった。基部の高さについては、一般的には第一突帯(最下部突帯)を含めての数値で表されていることが多いが、断面三角形の突帯の場合はその頂点で測るとしても、断面台形の場合は測定位置がまちまちとなる。そこでここでは、突帯の付け根部分までを基部の高さとした。

これにより、大きく3つのグループに分けることができる。

A群 底径/口径が0.65以上で、基部の高さ/器高が0.25~0.35のもの。いわゆる「筒形」状の埴輪である。浅間塚古墳、宮内2号墳、八龍塚古墳にみられる。

B群 底径/口径が0.4~0.6で、基部の高さ/器高が0.25~0.4のもの。いわゆる「ラッパ」状に開くタイプであるが、基部は相対的に短い。八龍塚古墳、上原3号墳、稻荷2号墳、亀の子塚古墳にみられる。

C群 底径/口径が0.4~0.6で、基部の高さ/器高が0.45以上のもの。「ラッパ」状に開くタ



第32図 突帯数別にみた埴輪出土古墳分布図

No	古墳名	墳形	規模	No	古墳名	墳形	規模	No	古墳名	墳形	規模
1	観音塚古墳	円	41	21	稲荷2号墳	前方後円	39	41	牧ノ内27号墳	円	26
2	境林古墳	円	20	22	下台原古墳	前方後円	57	42	茶臼塚古墳	前方後円	77
3	権現山古墳	前方後円	40	23	上原3号墳	前方後円	21	43	毘沙門山古墳	前方後円	41
4	千が窪古墳	円	—	24	羽生田茶白山古墳	前方後円	68 (145)	44	三味線塚古墳	前方後円	—
5	市橋横塚古墳	前方後円	52	25	富士山古墳	円	65	45	赤麻赤塚古墳	—	—
6	向北原8号墳	前方後円	42	26	亀の子塚古墳	前方後円	43	46	岩舟甲塚古墳	円	65
7	天王塚古墳	前方後円	43	27	判官塚古墳	前方後円	61	47	米山古墳	前方後円	47
8	鶏塚古墳	円	—	28	横塚古墳	前方後円	52	48	佐野八幡山古墳	円	46
9	龜山大塚古墳	円	30	29	絹4号墳	前方後円	—	49	一瓶塚稲荷神社墳	円	—
10	新田山古墳	円	—	30	壬生愛宕塚古墳	前方後円	53	50	蓮沼3号墳	円	16
11	大和田富士山古墳	前方後円	51	31	箕輪古墳	—	—	51	中山8号墳	—	—
12	上大曾1号墳	前方後円	31	32	吾妻岩屋古墳	前方後円	84 (115)	52	小峰山古墳群	—	—
13	猿山12号墳	円	10	33	甲塚古墳	前方後円	85	53	正善寺古墳	前方後円	84
14	下桑島西原2号墳	円	20	34	琵琶塚古墳	前方後円	123	54	助戸十二天古墳	前方後円	—
15	西赤堀狐塚古墳	前方後円	36	35	摩利支天塚古墳	前方後円	120	55	機神山山頂古墳	前方後円	36
16	笹塚古墳	前方後円	100	36	篠塚稲荷古墳	前方後円	62	56	水道山山頂古墳	前方後円	35
17	八龍塚古墳	前方後円	40	37	桑57号墳	前方後円	36	57	明神山古墳群	—	—
18	塚山古墳群	前方後円	—	38	足尾塚古墳	円	33	58	小曾根浅間山古墳	前方後円	55
19	雀宮牛塚古墳	前方後円	57	39	外城1号墳	前方後円	40				
20	狼塚古墳	前方後円	27	40	宮内2号墳	円	28				

第5表 突帯数別にみた埴輪出土古墳一覧表

イブで、基部は相対的に長い。稲荷2号墳、亀の子塚古墳、足尾塚古墳、西赤堀狐塚古墳にみられる。

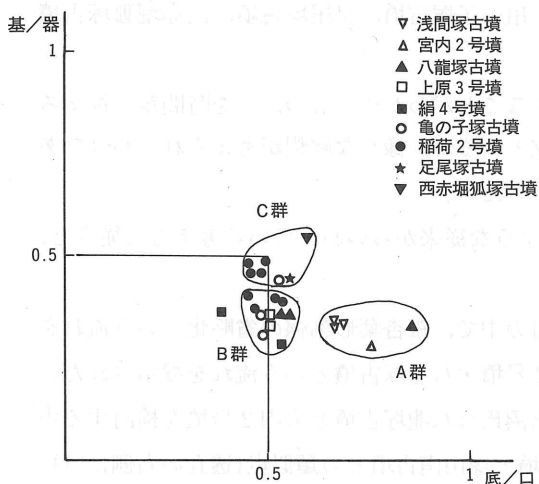
以上、同一古墳においても2種類の埴輪が供伴することがわかる。このことを時間差と捉えるか、制作集団の工人差とみるか、あるいは追加樹立とみるか、様々な解釈が考えられるわけであるが、ここではこれを時間差と考え、論を進めていきたい。

第35図はA～C群の変遷試案である。前述したような従来からいわれている考え方に従うと、A→B→Cという流れが考えられる。

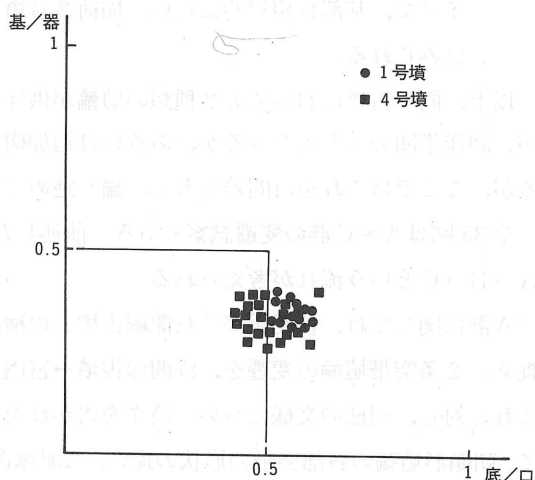
A群に関しては、秋元氏が『八龍塚古墳』の検討の中で、銀杏葉形刻線の省略化という流れを捉え、2条突帯埴輪の変遷を、浅間塚古墳→宮内2号墳・八龍塚古墳という流れを提示された。これに対し、同様の文様について論文を書かれた水沼氏は八龍塚古墳と宮内2号墳を検討する中で、朝顔形埴輪の肩部突帯の形状の違い、八龍塚古墳と塚山南古墳との類似点(透孔の右側に「」)文線刻を持つことなどから、宮内2号墳→八龍塚古墳という変遷を示された。浅間塚古墳については両氏ともB種ヨコハケを持つことから一番古手にしている。次に宮内2号墳がくる点に関しては共通しているが、八龍塚古墳に関しては意見が分かれる。本稿では、前述した流れによる変遷を考えている立場から、A群とB群の供伴する段階として八龍塚古墳を考え、宮内2号墳に後続する段階と捉えたい。以上のような考えに基づき、Ⅰ～Ⅲ段階を設定した。

Ⅳ段階については、本県において資料が非常に少ないので後述するとし、Ⅴ段階についてみる。この段階の古墳として考えられるのが、亀の子塚古墳、稲荷2号墳、足尾塚古墳、西赤堀狐塚古墳である。この4古墳をさらに2つのグループに分けることができる。亀の子塚古墳と稲荷2号墳はB群とC群が供伴し、足尾塚古墳と西赤堀狐塚古墳はC群のみである。変遷表上はB群とC群供伴をⅤa段階とし、C群のみをⅤb段階としたが、これを時間差と捉えるか、あるいは各古墳の個性と捉えるかは、現時点の資料では決しがたい。すなわち、亀の子塚古墳と稲荷2号墳は供伴土器などからほぼ同時期の所産と考えられるが、足尾塚古墳にしても西赤堀狐塚古墳にしてもそれぞれの供伴遺物からの時期決定が難しい古墳である。具体的に言えば、足尾塚古墳に関しては、森田氏の意見を借りれば、低位置突帯埴輪が供伴すること、横穴式石室の形態などから7世紀初頭くらいの年代を考えられている^{註⑬}。低位置突帯埴輪は本県において6世紀後半～7世紀初頭という年代幅^{註⑭}があり決定打に欠ける。また、西赤堀狐塚古墳は、形象埴輪、鉄鏃、刀子などが出土しているが、6世紀後半以降であることは間違いないと思われるが、さらに時期を絞りこむことは難しい。今後の資料の増加を待ち、時期の問題であるか、あるいは地域の問題であるかは検討していくとし、ここでは、ⅤaとⅤbを同一時期の範囲内で捉えておきたい。

最後にⅣ段階であるが、本県における資料があまりにも少ないために検討の余地は残る。そこで、対象地域から外れるが、本県に接する群馬県太田市所在の塚廻り古墳群のデータを使い同様のグラフを作成してみた(第34図)。ほぼB群の範囲内におさまる。塚廻り古墳群の築造時期は6世紀の第2四半期～第3四半期と考えられており、本県において資料が不足している時期に当^{註⑮}



第33図 2条突帯埴輪法量対比図



第34図 塚廻り古墳群円筒埴輪法量図

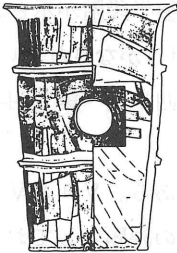
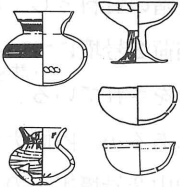
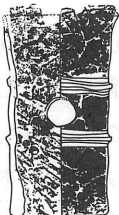
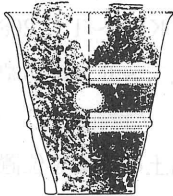
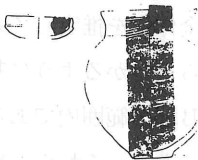
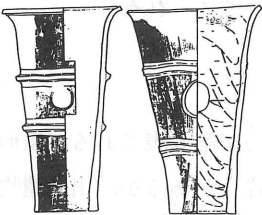
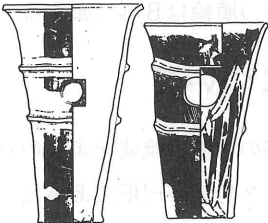
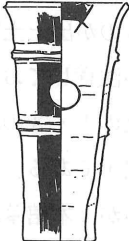
たる。この結果、Ⅲ段階とⅤ段階を埋めるものとして、B群のみで構成される段階を考え、これをⅣ段階としたい。

以上Ⅰ～Ⅴ段階までの変遷を考えたが、次に、それぞれの段階の実年代について少し考えてみる。

Ⅰ段階は2条突帯埴輪においてB種ヨコハケを持つ段階である。B種ヨコハケの採用は川西編年におけるⅢ～Ⅳの段階である。^{註⑱}本県で、B種ヨコハケを持つ埴輪を出土している古墳としては佐野八幡山古墳、笹塚古墳、塚山古墳、桑57号墳などが挙げられる。いずれも川西編年のⅢ～Ⅳの段階に位置付けられている。浅間塚古墳に限って見れば、その線刻の特殊性から塚山古墳群との関連が考えられている。同様のB種ヨコハケを持つ塚山古墳は最近の調査により、TK 73～208型式段階の須恵器甕、^{註⑲}蓋坏が出土している。浅間塚古墳からは3個体の埴輪が出土しているが、それぞれ外面調整が微妙に異なる。B種ヨコハケを部分的にもつもの、^{註⑲}C種ヨコハケを部分的にもつもの、タテハケ1次調整のみのものである。これらは川西編年Ⅳ期には位置付けられるものの、やや新しい様相を示す。

Ⅱ段階はA群のみで構成されるがタテハケ1次調整のみとなる段階である。これは川西編年におけるⅤ期にあたり、川西氏はⅤ期の上限をTK 23の時期としている。但しⅣ期の新しい段階においては、外面の2次調整の粗雑さや省略が目立つようになるという。^{註⑲}宮内2号墳ではTK 208型式の須恵器が出土している。供伴する土師器においては、和泉期の範疇で捉えられるものの、^{註⑲}高坏・椀などに新しい様相がみられるとの指摘がある。ここでは須恵器の年代も鑑みTK 208以降としたい。

Ⅲ段階は、A群とB群が供伴する段階である。供伴遺物がなく、実年代の検討が直接できないが、前述したように塚山南古墳との関連が考えられることから、5世紀末～6世紀初頭と考えておきたい。

	A 群	B 群	C 群	伴出土器
I				
II				
III				
IV				
V				
				

第35图 2条突带埴轮变遷案図

scale 埴輪=1/16

IV段階は、B群のみの段階である。現時点では上原3号墳の資料だけであるが今後増える可能性が考えられる。上原3号墳の時期については、その出土遺物から6世紀後半段階が示され、また、古墳群全体の流れの中で、埋葬主体部が横穴式石室採用以前との位置付けがなされている。^{註②}

また、地域が違うが、塚廻り古墳群もB群のみの構成であり、6世紀第2四半期～第3四半期の位置付けがなされている。

V段階はB群とC群が供伴(Va)、あるいはC群のみ(Vb)の段階である。VaとVbが時間差であるか地域差であるか、あるいはその古墳毎の個性であるかは今後の課題としておく。V段階の資料としては、稲荷2号墳と亀の子塚古墳が供伴遺物を持ち、ある程度時期決定ができる。稲荷2号墳については、梁木氏が聖山2号墳出土土器との検討によりTK43型式以降との位置付けをされている。^{註④}第35図では、亀の子塚古墳の供伴土器を示しておいた。^{註⑤}土師器坏は1点だけではあるが、内面ナデ調整であり、法量的にも稲荷2号墳の坏と類似する。須恵器甕は形態的には聖山2号墳出土のものに近いが、頸部の波状文や胴部の刺突文などは崩れている。須恵器甕も形態的には似通っていることから、両古墳は同時期の所産と考えられる。

上記の基準から各段階を整理してみる。I段階はTK73～TK208(5世紀後半前葉)、II段階TK208～TK23(5世紀後半後葉)、III段階は5世紀末～6世紀初頭、IV段階は6世紀前半後葉～後半前葉、V段階はTK43以降(6世紀後半後葉～7世紀初頭)と考えておきたい。

以上2条突帯埴輪についてみてきたが、次に本墳出土の埴輪を位置付けてみたい。本墳出土の埴輪は事実記載でも述べたように、全体像のわかるものがない。そこで、既知データから埴輪の全体像を推定してみる。第36図は横軸に底径を、縦軸に基部の高さをとったものである。これからもわかるように基部に関しては、宮内2号墳に近い計測値を示し、基部の高さにおいてもA・B群の範囲内である。底径/口径については、底径が15.4～18cmであり、口径が24.8～30.6cmである。これらの数値を使い平均値を出してみると、0.61とほぼB群の範囲内に当たる。これらのことから本墳出土の埴輪はB群に属するものと考えられる。

4 土器について

本古墳群内の3基の古墳の概要をまとめたものが第6表である。墳形の上では南原古墳が前方後円墳で、1号墳・2号墳が円墳であるという違いがあるが、出土遺物の点では、2号墳は埴輪を持ち、南原古墳・1号墳は持たない。このことは時間的差異に基づくものなのであろうか。この問題を解く手がかりとなるのが出土土器である。但し、この検討に入る前にそれぞれの土器の出土状態について、いくつか注意しておかなければならない点がある。

まず1つは、1号墳出土の1・3の出土位置である。第III章1でも述べたように、この2つの土器は木棺墓直上よりの出土である。本墳の埋葬主体部が、墳丘が削平された今どこにあったかは不明と言わざるを得ないが、木棺墓が主体部だった可能性が考えられる。近隣に目を転じてみると、宇都宮市の西部に位置する聖山公園2号墳でも同様の大型土坑が確認されている。但し、